

卒業論文

外国人技能実習生と地域社会との関係性構築の可能性

2017 年度入学
九州大学 文学部 人文学科 人間科学コース
社会学・地域福祉社会学専門分野

2021 年 1 月 提出

要約

日本の労働者不足が進むにつれ、外国人技能実習生（以下、技能実習生とする）の受け入れ数が右肩上がりに上昇している。しかし、労働力としての受け入れが推進される一方で、人権侵害を防ぐための仕組みや、日本社会で暮らすための生活のサポートが十分にされていないことが課題である。

加えて、技能実習生の研究は、労働問題や人権侵害、制度の課題については多くの蓄積があるが、技能実習生の生活や人間関係、地域参加についての研究は少ない。今後、技能実習生が増えしていくうえで、地域社会がどのように受け入れていくか、といった視点も重要だと思われる。

現状、多くの技能実習生は地域社会との関わりが希薄であるが、受け入れ企業、監理団体の方針や地域社会の受け入れ体制次第では、地域社会との関係性を構築していくことも可能である。そうすることで、技能実習生には日本語能力の習得と、それに伴う帰国後のキャリアアップというメリットがあり、地域社会にとっては地域の活性化といったメリットがある。しかし、重要なのは技能実習生の意向であり、これまで取り上げられることが少なかった。

そこで、本論文では、技能実習生の生活実態や人間関係、地域参加への意向を明らかにするため、中国人技能実習生（以下、中国人実習生とする）とベトナム人技能実習生（以下、ベトナム人実習生）を対象に調査票調査を行った。調査には紙媒体のものと Google フォームを併用し、各言語に翻訳して配布した。中国語版 95 票、ベトナム語版 90 票の計 185 票が集まり、そのほとんどが依頼した監理団体下の技能実習生からの回答であった。結果として、技能実習生は二分化していることが確認された。日本文化や日本語の習得に関心を持って来日する技能実習生は、日本人との交流や地域活動、異文化交流活動に意欲を示し、実際に人間関係を広げている。一方で、賃金を稼ぐという目的に徹し、その他のことにあまり関心を示さない技能実習生も存在した。その最も大きな差は国籍であり、前者にベトナム人実習生、後者に中国人実習生が多かった。こういった差が出た背景には、その国の経済発展の度合いと個人の将来の志向があるのではないかと考えられる。また、最も大きな困りごとに言語が通じないことが挙げられ、技能以外で学びたいことに日本語の習得が挙げられることから、地域における日本語教育の重要性に着目した。

技能実習生に日本語教育を行う主体として、長野県松本市のモデル日本語教室の事例をとりあげた。はじめに、文化庁の「地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業」と、それを活用した長野県の「地域日本語教室創出支援事業」について整理し、モデル日本語教室の 1 つである松本市の事例について説明した。加えて、松本市の教室を担当する地域日本語教育コーディネーターの S 氏に対する聞き取りと、日本語教室での参与観察を行った。松本市の日本語教室は、コーディネーター、日本語教師、日本語交流員などの立場と役割を

明確にすること、そのような扱い手に正当な対価が支払われることを通して、しっかりととした体制づくりを行っていた。また、単に日本語の文型を教えるだけではなく、数人で日本語での会話をする機会を設けており、コミュニケーションを重要視していることが伺われた。松本市のモデル日本語教室では、技能実習生と地域住民の「顔の見える・名前の呼び合える関係性」が構築されていた。しかし、一方で、日本語交流員が講座終了後、活動に繋がりづらいなどの課題があり、活動に関わる人を増やしていくことが今後求められる。

最後に、まとめを述べる。従来、技能実習生は単純な出稼ぎで、非社会的な存在であると考えられていた。しかし、本調査では、技術や賃金の獲得だけでなく、日本に様々な興味・関心を持ち、交友関係を広げることや、地域参加に対して意欲的な技能実習生の存在が明らかになった。彼ら・彼女らは技能実習という機会を通じて日本で様々な経験を積み、将来の可能性を広げようとしているのではないだろうか。そこで浮き彫りになったのが日本語支援の重要性である。今後は、地域の日本語教室の盤石な体制づくりと、そこに関わる地域住民を増やしていくことが求められる。

本論文では、主に日本語支援について取り上げたが、地域交流のかたちはひとつではない。日本の文化や行事、観光地に対する関心も高く、交流自体が日本語学習のモチベーションにつながることも確認された。しかし、地域活動や異文化交流活動を通して日本人の知り合いができた、という人は今のところ少ないため、今後は、関係性が持続されるような活動が求められるのではないだろうか。

技能実習生の受け入れは今後も増加していくだろう。その際、技能実習生に選ばれるような地域づくりをすることは、巡り巡ってはその地域のためになるのではないだろうか。技能実習生が地域の産業を支え、地域社会は技能実習生の日本語支援や交流活動を行う。それは「人づくり」という国際貢献にも繋がり、地域の安定的な技能実習生の受け入れにも繋がると思われる。そうした、双方にとってプラスになるような関係性の構築が、技能実習生と地域社会との理想的な関わり方なのではないだろうか。

目次

1はじめに.....	1
2外国人技能実習制度の概要.....	1
2.1 受け入れ方式について	2
2.2 在留資格について	3
2.3 職種・作業について	7
2.4 沿革	8
3外国人技能実習制度の現状と課題.....	10
4外国人技能実習生と地域社会との関係性.....	13
5ベトナム人・中国人技能実習生への調査票調査.....	18
5.1 調査の概要	18
5.2 技能実習生と受け入れ企業の基本属性.....	20
5.3 技能実習生の日本に対する興味・関心.....	21
5.4 技能実習生の人間関係	26
5.5 技能実習生の労働と生活	30
5.6 技能実習生の交流意欲	35
5.7 交流への意欲とその要因	39
5.7.1 日本人との交流意欲と要因	40
5.7.2 地域活動への参加意欲と要因	43
5.7.3 異文化交流活動への参加意欲と要因	44
5.8 地域参加の役割	45
5.9 小括	47
6長野県松本市のモデル日本語教室.....	49
6.1 文化庁の地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業について	49
6.2 長野県の令和2年度地域日本語教室創出支援事業について	49
6.2.1 コーディネーターの配置.....	50
6.2.2 地域日本語学習モデル教室への日本語教師及び日本語交流員の配置	50

6.3	松本市のモデル日本語教室の概要.....	51
6.4	地域日本語教育コーディネーターへの聞き取り	51
6.4.1	日本の外国人受け入れと言語保障	51
6.4.2	松本市のモデル日本語教室がめざすもの.....	52
6.4.3	技能実習生と地域社会について.....	52
6.5	松本市のモデル日本語教室への参与観察.....	53
6.5.1	授業の流れ.....	53
6.5.2	交流の様子.....	53
6.5.3	顔の見える・名前の呼び合える関係性の構築.....	54
6.6	長野県・松本市のモデル日本語教室の課題と展望	55
7	考察	55
	参考文献	57
	謝辞	61
	付録 外国人技能実習生との共生の地域づくりアンケート	62